本読み会会誌

リーダーズ

第四号
2009.1.29新

追悼　ハロルド・ピンター

２００８年１２月２４日、ハロルド・ピンターが亡くなりました。“難解”で“不条理”な戯曲で世界中の演劇人に影響を与え、ノーベル文学賞も受賞している、戦後を代表する劇作家の一人でした。同

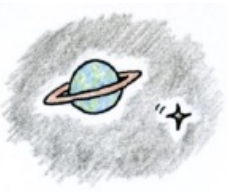
年８月の第二十六回『本読み会』で、彼の戯曲『帰郷』を取り上げましたが、その際、「ピンターってまだ生きてるの？」「生きてる生きてる」なんて会話をしたばかりでしたので、死の報せにはもちろん驚きましたし、時代というものはこうして移り行くのかな、とも思いました。

私は、作家を知るには、作品を読むのが最良の道だと考えていますが、『本読み会』で取り上げるまで、彼の作品はほとんど読んだことがなく、作品選定の為に急いで戯曲集に目を通した程度でした。正直、冒頭に上げたような何となくのイメージばかりで、親しみのある作家ではありませんでした。当日も、「ピンターって誰？」と、初対面の挨拶をするような気持ちで本読みに臨みました。

はたして『帰郷』は、私にはとても意外だったのですが、「これ実話なんですよ」とピンターに言われたら信じられるような、とても生き生きとしたリアリズムに貫かれた戯曲でした。“難解”も“不条理”も、私たちの周り、ごく近くにあるもので、リアリズムだからこそのものではないか、と私には感じられました。『帰郷』は、文句なしに面白い戯曲で、私とピンターとの最初の出会いは、素晴らしいものになりました。

しかし、当然の事ながら、たった一度の出会いでは、人のその一面でさえはっきりとは理解出来ず、今でも私は「ピンターって誰？」と考えています。今回のリーダーズは、ピンター追悼特集として、一緒に『帰郷』を読んだ中からお二人に文章を寄せていただきました。（お忙しい中、本当にありがとうございました）両人も、「ピンターって誰？」と考えているのではないでしょうか。作品を読み、ものを思う事が、作家への追悼になればと思います。

大野　遙



ハロルド・ピンターと「帰郷」について

江尻　裕彦

２００５年度のノーベル文学賞を受賞した英の劇作家で演出家・俳優としても活動したハロルド・ピンターが２００８年１２月２４日に亡くなった。６年前にがんを患ってから闘病生活を続けていた。享年７８歳。

彼の死に遡ること４か月、８月末に本読み会でピンターの作品「帰郷」（６５年初演・小田島雄志訳）を読んだ。ここではその感想に織り交ぜながらピンターの作品全般への私見を述べたいと思う。

海外ではノーベル賞受賞で改めて知名度を上げたが、近年では作品自体がほとんど上演されず、８０年代以降の作品に至っては紹介もされていない日本においてはピンターと言うといわゆる６０年代の不条理演劇の作家、転じて難解、深刻という印象が一般的には強いと思われる。私自身も原語で作品にふれるまではこういった印象に支配され、正直やや敬遠していた作家である。

ところがピンターの作品、とりわけ「背信」を何度も取り上げている演出家デヴィッド・ルヴォーに言わせると彼の作品は“FUNNY・おかしい”らしい。実際、英・フェイバー社刊行の全集の裏表紙には「背信」を“喜劇”と呼ぶ批評家のコメントも載せられている。

確かに「帰郷」を含めた初期の作品群「部屋」「誕生パーティ」「管理人」などに出てくるやりとり、不気味な人間、理由のわからない突発的な暴力・衝動からはピンターを不条理の作家と呼びたくなるのに十分な印象を受けるのかもしれない。

そこから隠喩的な読み取りをしすぎる、というのも的確ではないと思われる。ピンター自身もかつて「管理人」について、‘あれは旧約聖書と新約聖書の神の話か？’と問われ、‘いいえ、あれは２人の兄弟と浮浪者の話です。’とはっきり答えている。

そこで「帰郷」を声に出して読んでみてより鮮明に分かったのだが、一見すると取り留めのない、時に謎めいても聞こえるやりとりが実は各人物の立場からするとすべて意味のある、必然的なものであるということだ。但しピンターの作品で語られるその言葉にはその裏に隠されている別の意味があり、またその意味を掴まずしてただ漫然と読んでいるだけではそれぞれの台詞は成立しない。そして言葉が語られない瞬間、沈黙や間にも同じく意味が潜んでおり、言葉が語られている時と同じくらい何かを告げている。その点がそれまでの作家の書く戯曲とは異なるのかもしれない。再びピンターの言葉を借りれば、‘語られる言葉の下にわかってはいても語られぬものがある場合がある’、‘述べられている事の下で別の事が述べられているような言語’という形で説明している。

ではその隠された意味とは何か？大学教授のテディが妻ルースを連れて数年ぶりに生まれ育ったロンドンの家族のもとに帰る、そこで妻ルースはテディの家族により母、妻、娼婦として扱われるというあらすじの「帰郷」の場合ではマックス、レニー、ルース、テディ、ジョーイという家族の間で起こる主導権争い、そのための攻撃・反撃、思惑の探りあいであると私は思う。そしてこのそれぞれの人物の思惑のずれが時に場面を“おかしく”する。だが同時に利己的で残酷なやりとり、時に過去の記憶は捻じ曲げられ曖昧になり、性は武器となり、恫喝や直接的な暴力も厭わないやりとりは怖さも併せ持つ。この“怖くておかしい”というのが私にはピンターの作品の最大の特徴の一つであると思われる。ピンターの盟友であり「帰郷」の他多数の初演を手がけた演出家のピーター・ホールもピンター作品の特徴を‘おかしく、暴力的で詩情豊か’と評している。

更にいえば個々人の間にある冷たさ、悪意だ。マックスやジョーイ・レニーにより眼の前で自分の妻を娼婦のように扱われてもなお沈黙を守り続けたテディものちには反撃・抵抗に出る。だがそれはこっそりレニーのチーズロールを食べるというある意味滑稽な手段によってだ。当然レニーは怒る。つまらない反撃だが私はそこにテディの悪意を感じずにはいられない。

この戯曲の中でもう一人の登場人物・サムだけは基本的に争いを好まない、が、主にマックスによってだが攻撃をされ、追いつめられればサムもやはり

防衛には出る。しかしこのような周囲の争い、攻撃・反撃に耐えきれなくなったサムは物語の終盤に倒れる。善良さ、ナイーブさを抱えたサムのような人物は生き残れない残酷な場所、敢えて言えば獣の檻のような世界がこの戯曲の舞台なのだ。ここでは言葉は自分の領域を守り、相手を攻撃する武器となる、一見するとごく普通の設定―例えば家庭でありながら人物のやり取りが進むにつれ全く違う様相を呈しているというのもまた特徴であるといえよう。

こうした個々人のなかに見出された悪意はピンターがより政治的な意識を鋭くしていった８０年代以降の作品では国家や組織に反映されるようになる、「パーティ・タイム」「ワン・フォー・ザ・ロード」「マウンテン・ランゲージ」「灰は灰へ」などはそのよい例である。ここでは架空の軍事独裁国家からトルコ政府のクルド人の扱い、アウシュビッツなどが盛り込まれている。作品以外の場でも政治的な発言が次第に比重を増し、ノーベル賞の受賞スピーチではイラク侵攻に賛成・協力した当時のトニー・ブレアー首相を痛烈に批判した。

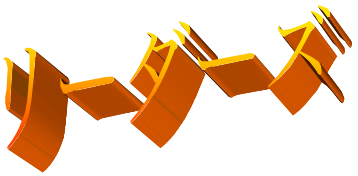
そしてもう一つの大きな特徴は沈黙、間、句切れの使い方である。それぞれがはっきりとした長さの違いがあり、状況に合わせて意識的かつ厳格に用いられている。結果としてピンターの書く会話は非常に音楽的で詩的、シェイクスピア、ラシーヌやチェーホフにも通じる点がある。間や沈黙は何かを待っている為に起こるのではなく、常に戦いの緊張をはらんだり、語られない言葉が夥しく語られているときなのだ。

怖くて同時におかしく、言葉は武器となり、各人は獣のように利己的で残酷で思惑は伝わらない、殺伐として荒涼とした世界、ピンターはそんな風にわれわれが住む２０世紀以降の世界を切り取っているのだと思う。

普段は非常に気が短く、気難しい強面の印象が強かったピンターだが演劇界の同僚、特に劇作家には寛大で讃辞や援助を惜しまず、下の世代の作家、デヴィッド・マメットなどの作風にも大きな影響を与えた（マメットの世界においても言葉とは生き残りをかけた生活の中で用いられる武器である。その彼の代表作「グレンギャリー・グレン・ロス」を気に入り、その初演を英国立劇場でできるよう取り計らったのも、「オレアナ」英初演演出を手掛けたのもピンターである）

演出家としては同じ英の劇作家サイモン・グレイの作品の演出も多く手がけた。また晩年まで俳優として積極的に自身の作品にも出演した。そして劇作と平行して映画の脚本もいくつか手がけた、その多くはカレル・ライスとジョセフ・ロージー監督のためであった。

ハロルド・ピンターの死は現代の重要な劇作家を一人失ったという点では非常に残念だが、その冥福を祈ると共に追悼や回顧を機に日本でもより多くの作品が紹介・最評価される事を念じてやまない。



ハロルド・ピンターたちの死について

谷　賢一

２００８年のクリスマス・イブ、２０世紀最大の作家の一人であり、戯曲文学を暗くねじれた形で革新した挑戦者であるハロルド・ピンター氏が亡くなった。７８歳だった。その一報は、とても奇妙で嫌らしく皮肉な形で僕の目に触れることになった。何やら隠喩的でもあり、見方によっては嘲笑的とも感じられたものだ。

その日僕は、自分の劇団に所属する女優の日記を見た。mixi 上の走り書きである。時刻は４時４８分。彼女は以前にも４時４８分に陰鬱な内容の日記を書いていて、僕が彼女にサラ・ケインを読めと薦めたことがある。サラ・ケイン、１９９０年代のイギリス劇壇において最大の話題をさらったその女流作家が発表した生前最後の作品が、『４時４８分サイコシス』である。mixi という浅薄な馴れ合いコミュニティに書かれたある女の日記が、二度に渡って４時４８分という時刻を示したという、見過ごそうと思えばいくらでも見過ごせる、何てことのない偶然を、自分は面白いと思った。４時４８分という時刻には、何かやはり魔術的な力があるのだろうかと。

無責任に面白がって「サラ・ケイン読め読め、あ、でも翻訳あったかな」みたいなコメントを残した自分に、横レスする形で別の友人が絡んできた。これも演劇上の友人だが、これは僕がその人の知識と才能に多少のやっかみを抱きつつも賞賛している男で、まだそれほど親しくもないものだから話題を振られたこと自体に少し驚いてもいたのだが、書き込みの内容には文字通り言葉を失った。それは単純にその情報がショックであったということだけでなく、偶然の連続に少し背中が寒くなったからである。ハロルド・ピンターが死んだと言う。

サラ・ケインもまた傍若無人で繊細な挑戦者だった。ジョン・オズボーンが怒りを込めた拳を振りかざしてイギリス演劇界のスノビズムに殴りかかったように、シド・ヴィシャスが客席にうんこを素手で投げつけながらイギリス社会を罵倒したように、サラ・ケインは暴力的なセックス描写と破綻した構成のストーリーで２０世紀末のイギリスの面の皮を剥ぎ取ろうとした。そんな彼女がもっとも影響を受けた作家の一人がハロルド・ピンターである。

４時４８分の符号に浅ましい高揚をかき立てられ、インターネット上の陳腐な馴れ合いの場でニヤニヤしていた自分の前に、横から飛んできた訃報、しかもその名がハロルド・ピンター。たいしたことのない偶然のように聞こえるかもしれないが、偶然に価値を認めるか否かはひとえにその人物の主観にかかっているのだし、そうして大げさな解釈を与えられた偶然が、創作家の心をくすぐり続けてきたのが芸術の歴史の一側面である。冒頭に「隠喩的である」と書いたのは、まずサラ・ケインの死と切り離せない４時４８分という数字について考えていたところにハロルド・ピンターの訃報が飛び込んできた、という意味でであるが、同時に、この二人のように文学にとって、つまりは人間という謎に対する

人文科学上のアプローチにおいて最大級の仕事をした二人について、ほとんどの人が無知であるばかりか、自分すらも気づかずにいた、しかも一報を聞いたのがよりにもよってこの糞ったれな mixi 上であった、という意味において、である。文学の地位の低下と人々の無知を半ば嘲笑っていた自分だが、その自分が mixi でピンターの死を知る。それは、隠喩的であるばかりでなく、嘲笑的である。ひどく

悪趣味なコメディだが、よくできていると思った。

さて、そんなとき、僕が相談できる相手は、あの人しかいない。Google 先生である。ピンターについて何かを語ろうと思っても、相手は数えるほどもいない。ましてや深夜である。Google 先生、どういうことですか、と検索語を打ち込んでみたが、追い討ちをかけるように、ピンターの死が国内ではほとんど報道されていないという事実を知った。彼がイギリス文学に寄与した業績のその内容を考えれば、また、ノーベル文学賞受賞者という皮相ではあるが絶大な権威を誇る冠の威光を考えれば、信じられないことである。飯島愛の死に埋もれて、ピンターの訃報は一行、二行で済まされてしまった。

最近特にメランコリックでペシミスティックな自分には、こういった様々のことが、文学の死という大仰な飾り文字を掲げて迫ってくるように思えた。ピンターの作品から我々は何を学んだだろうか。ピンターの死に我々は何を思っただろうか。答えはほぼゼロに等しく、どんなに考えてもゼロに等しく、ピンターほどの仕事をしても世界の真ん中に空いている愚鈍と無知という穴や、循環する歴史が証明する人間の動物的蛮行を前にしては全くの無力であり（ピンターは晩年政治活動に献身し、アメリカの覇権主義を厳しく批判した）、芸術も文学も一時の気晴らし、pastime でしかないのだろうか、と気持ちがぐずつく。pastime とは無論これで一つの単語であるが、辞書も引かずに想像を巡らす限り、pass time、時間を過ごす、という語からの派生だろう。一歩一歩と近づいてくる死に行き当たるまでの時間潰しにしか、文学や芸術や用を成さなくなってしまったのかもしれないし、いや、今までずっとそうだったのかもしれない。

今ちょうど読んでいる本の一説に、ある作家の言葉としてこんな一行が引かれている。「文学とは生存がしかけてくる攻撃に対する防衛策である」（スーザン・ソンタグ『反解釈』p78、チェーザレ・パヴェーゼの日記より）。ここでいう防衛策とは能動的・反抗的な意味に感じられるが、受動的な意味のバイアスをかけてこの言葉をそらんじると、やはり pastime という言葉に行き着くような気がする。「文学とは生存がしかけてくる攻撃に対する防衛策＝pastime である」。かつては文学が娯楽であると同時に啓蒙であり、教養であると同時に栄誉であったような時代もあった。だが、文学は死んだのだろう。

そういう時勢の中で、しつこく文学を読もうとしているこの本読み会という取り組みは崇高ですらあると僕は思っているが、今一つそこでのやりとりに知的興奮を覚えないというのも本音である。選ばれる戯曲はいつも美しいが、それを受け取る我々に覇気・鋭気が足らない。と言いつつ自分でさえ、迫り来る煩雑な日常にその場しのぎの組み手をとっているうちに身も心も疲弊して、とても胸を張れるような勉強ができていないのが実情であるから、フルタイムで働く人間に文学文学とわめいて聞かせるようなことはもはや犯罪的ですらある。心の隙間にそっと文学を、とか、電車では居眠りより読書がおしゃれ、とか、そういうくらいがちょうどいい。そういうくらいで仕方ない。文学は死んだのだから。

本読み会でピンターを取り上げたのは夏の盛り、２００８年の８月だった。彼の死去が芯まで凍るような１２月。サラ・ケインの死が１９９９年の２月２０日である。さて、２００９年の本読み会がどう展開されるか、楽しみである。

イギリス留学紀行　その壱

松山　立

ロンドンの夜は　紅いんです
　　ずっと　ずっと
たぶん　地平線のあたりまで
濃い　フォグライトが　道路にのびて
それが　うっすらと　闇に重なり
不思議な　紅を　見せてます
　　冬のロンドンの夜は
まるで　燃えてるようです

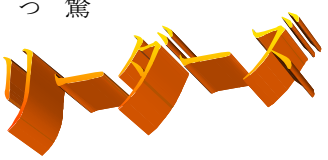
(Chage and Aska
『See Ya !』より)

昨年イギリスの地に降り立ってから、早いものでもう半年が経ちます。避暑地のように過ごしやすい夏はまたたく間に過ぎ、紅葉を楽しむ余裕もなく秋が終わり、毎朝の景色が霜で真っ白に染まる、長い長い冬のロンドンを迎えています。観光に来たわけでも、英語を学びに来たわけでも、異文化に触れて見聞を広げるためでもなく、ただただ、自分の演技をなんとかしたいというだけの想いを抱えて無理に日本を飛び出してきた、いわゆる「しなくてもいい留学」ですが、そのわがままのせいで『本読み会』には大きな迷惑をかけている償いの気持ちもあり、こうして筆をとりました。

私の留学先は「イースト１５演劇学校」といい、１９６１年にジョン・リトルウッド氏のシアター・ワークショップを基に設立され、現在は、数年前に文学座の『リチャード三世』を演出したレオン・ルービン氏が校長を勤める小さな演劇学校です。この演劇学校はロンドン郊外のエセックス大学と提携関係にあるため、卒業すると大学、あるいは大学院卒業と同等の扱いとなり、これはイギリスにおける演劇の地位を物語っているのかもしれません。生徒の大半はイギリス人ですが、私の所属する「修士演技・国際コース」には、アメリカ、カナダ、ドイツ、オランダ、ポーランド、イタリア、スペイン、デンマーク、パレスチナ、メキシコ、南アフリカ、マレーシア、台湾、日本と、実に多様な国籍の生徒がひしめき合い、教室では毎日多言語が飛びかう、まさに人種のるつぼの様なクラスです。ここには数百人の生徒が通っていますが、日本人は私だけです。

授業では基本的には英語を使って進めていくわけですが、それ以上に、演技そのもので互いに語り合っているというと、格好つけすぎでしょうか。わけもわからず飛び込んでしまった私が今のところ互角に渡り合えているのは、演技そのもののもつ、否が応にも他者への集中を要求する力に寄るところが大きいのだと実感しています。また、もうひとつ、非常に重要な意思疎通の手段として挙げられるのが、戯曲です。世界中から集められ、初めて顔を合わせて一本の劇を創っていくという全くもって無茶な試みですが、それでもシェイクスピアは互いに知り、チェーホフは読み、ピンターの死は大きな話題となり、『欲望という名の電車』でヴィヴィアン・リーは頭おかしくなっちゃったんだよね、といった話はできる。取りも直さず、世界中に翻訳された戯曲が文字通り共通言語となっています。『本読み会』の活動は小さなものですが、その実をここイギリスの地で感じるというのは、なかなかに感慨深いものがあります。

もう少し、授業について詳しく見ていきましょう。一年間は、三つの学期に分かれています。一学期では、基本的な演技術、グループ・ワークのやり方、そしてグローブ座でのシェイクスピア公演を経験します。二学期にはチェーホフ劇、さらにイギリスの現代劇作家に取り組み、演技をさらに細部にわたって掘り下げることを目的とします。そして三学期は卒業公演の準備にあてられ、これはロンドン中心部の劇場を借り切り、一年間の真価が問われることになるでしょう。学校の方針としては、スタニスラフスキイ・システムがベースになっているようで、「行動」、「目的」、「障害」、「貫通線」、「超目的」といったシステムの要素を、さまざまなエクササイズ、即興、そして戯曲を通じて理解していきます。イギリスの演技訓練にスタニスラフスキイ・システムがこれほど根深く浸透していることに驚くと同時に、私のような、行き当たりばっ



たりの演技を我流でこじるように続けてきた俳優にとっては、こうして体系立った演技訓練を肌で感じられるというのは非常にありがたく、まるで乾いたスポンジが水を吸い込むように授業を受けている毎日です。

私は日本も含め、他の演劇学校に通ったことがありませんから、一般的な俳優教育のモデルについて語ることはできません。百年くらい前のイギリスにおける俳優教育には多少通じているのですが、今さらそんなことは誰も知りたくないでしょう。しかしながら、私が思うに、ここの演劇学校で特筆すべきは、それぞれの授業内容が互いに関連しあい、上演における俳優の演技を向上させることへ導いているという点です。一週間の中で、発音、発声、動き、歌、戯曲解釈、殺陣、演技と、様々な種類の授業を受けていますが、その全てが学期ごとの公演を念頭に置いた内容になっており、さらに教師同士の連携、そして教師と生徒の関係までもが非常に密であることを感じます。ここが小さな演劇学校だからそれができるのか、それともイギリスにおける俳優教育が一般的にそういった点を重視しているのか、あるいは日本でもそれくらいやっているのか。

この、各々のトレーニングを関連付けて、公演における演技の質をどう上げていくかという問題が、まさに私が俳優トレーニングに興味を持った契機でした。先ほども申し上げましたが、私はこれまで体系的に演技を教わる機会もなければ、先輩とも先生とも呼べる人の存在もなく、聞きかじりの演技論をパズルのように組み合わせてきた俳優です。しかし、日本における現代演劇の俳優の多くは、私と同じ問題を抱えているように思えてなりません。留学はまだ半分以上残っていますが、帰国後、この体験を日本の若い俳優たちと共有し、その向上に携わることができれば、これ以上の喜びはありません。

2008年度の活動

	日時	場所	人数	作品	作家	備考
第二十三回	2月2日	アミ	8	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	
第二十四回	3月22日	アミ	3	好日	三好十郎	お話 :大野
第二十五回	6月21日	アミ	11	査察官	ゴーゴリ	お話 :松山　松山君を送る会）
第二十六回	8月23日	アミ	6	帰郷	ハロルド・ピンター	お話 :谷　英国留学シリーズ 1）
第二十七回	11月27日	アミ	7	エクウス	ピーター・シェーファー	お話 :大野　英国留学シリーズ 2）
忘本会！2008	12月27日	秋葉原	3			

２００８年を振り返って

第二十三回『夏の夜の夢』

毎年恒例のはずの“お正月だよ！シェイクスピア祭り”が、ダラダラしているうちに“節分だよ！～”になってしまいました。時間が足りず、忙しい進行になってしまいましたが、喜劇らしく、楽しく読むことが出来ました。

第二十四回『好日』

男三人での開催。こうなると黙ってもいられないので、三人ともよく喋ります。三好十郎が好きな作家だという事もあり、個人的にはいろいろと記憶に残る、意外と面白い回になりました。

花見

上野公園で場所取りして、さあこれから、というところで雨が降り出したので、秋葉原に移動。メイド喫茶に行ってから、お酒飲みました。メイド喫茶は思っていたより普通でした。

第二十五回『査察官』

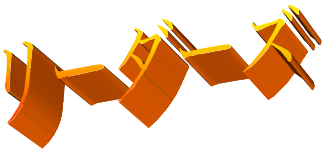
松山がイギリス留学で一年留守にするということで、彼の好きな戯曲を取り上げました。古さも新しさも感じさせるような、ユニークな喜劇。閉会後に“松山君を送る会”を開催。“おっぱい”の語源などについて話す。

第二十六回『帰郷』

イギリス留学スペシャル第一弾。進行役・松山の不在で開催が危ぶまれましたが、谷君の協力で活気ある回に。“こんな女許せる？”という話題が盛り上がりました。

第二十七回『エクウス』

イギリス留学スペシャル第二弾。初の平日夜の開催。“本をつまみにした飲み会”みたいになりました。酒が入ると、やはり陽気になるようで。アラン少年と父親がポルノ映画館で鉢合わせするシーンが、何故か論争の的に。

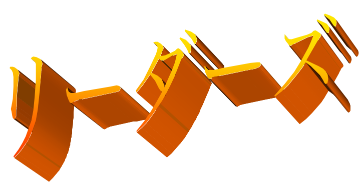
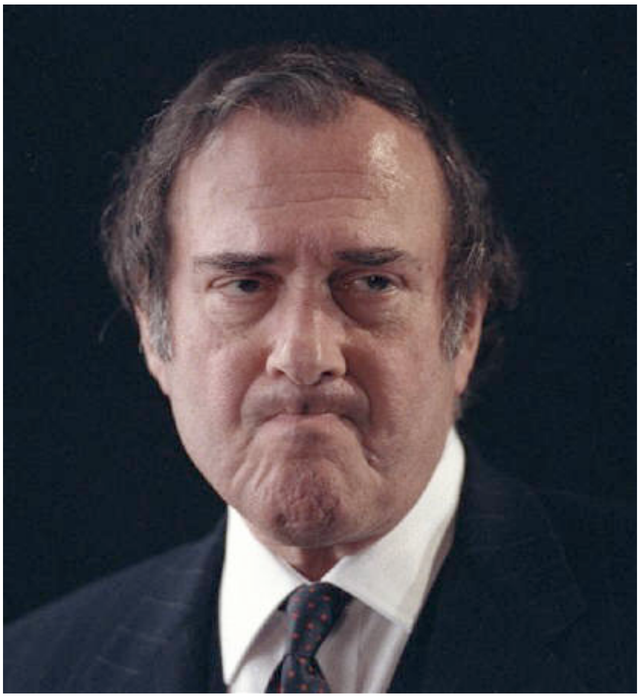
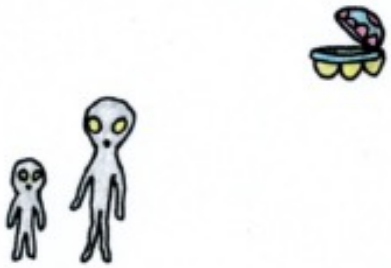


最後に

『本読み会』の活動を始める時、「継続は力なり、最低10年は続けよう」と言って始めました。まあ最初の数回は、物珍しさもあったのでしょう、そこそこ人数も集まり、こちらもこちらで、こんな事もしたい、あんな事もしたい、と夢見て惚けていましたから良かったのですが、これが回を追うにつれて、だんだん人を集めるのに苦労するようになり、近頃では男ばっかり３人なんて回さえ出る始末です。

　これだけ人が集まらないようになってくると、これもあれもなんていう初々しい夢はどこぞへと追いやられ、「次は会話すら出来ないのではないか？」という心配ばかりになるようで、ここ１年の活動を見てみますと、特別企画も無く、見事に名の通りに本読みばかりになっています。好く言えば求道的、悪く言えば退屈という具合でしょうか。

　しかし、人間、窮地にも自分の立つ地を見出すもので（それともただ慣れてしまっただけかも知れません）、あれほど恐れていた不人気も気にならなくなり、「人の少なきもまた味良きものよ」とか何とか言って楽しめるのだから、楽なもの。良い戯曲を、良い台詞を、ただ声に出し合うということが、やってみるとやっぱり楽しいんですね。それは男３人でも、やっぱり楽しいんです。まあそりゃ女のいる方が楽しいに決まってますがね・・・。

　そもそもが、「古今東西の劇作家をもっと勉強したいけど、一人じゃ飽きそうだから周りを巻き添えにしてやれ」という我侭から始まった活動です。付き合ってくれるお人好しな皆様に感謝。ただ本を読むという、地味を極める活動ももうすぐ６年目に入ります。初心に返り、細くとも長く、本を読んでいければと考えております。

大野　遙